

バガヴァーン・ニッテヤーナンダのプンニャティティを祝って

あまねく浸透しているバガヴァーン・ニッテヤーナンダの存在 スワミ・ヴァースデーヴァーナンダ と イーアン・アーノルド

今月を通して、私たちは偉大な精神の師、バガヴァーン・ニッテヤーナンダをたたえます。彼はジャンマ・シッダ、すなわち生まれながらのシッダであり、万物に浸透する大いなる意識と一つであるという自身の気づきと共に生まれました。

生涯を通じて、バガヴァーン・ニッテヤーナンダは無数の人々が自分自身の内側の神を体験することを可能にしました。彼の前では、誰のマインドも穏やかで至福に満ちた状態に引き寄せられたものです。多くの信奉者はバデ・バーバと物理的に一緒に居たいと望みましたが、かないませんでした。バデ・バーバは、「落ち着いていなさい。私はあらゆる所にいる¹」と、断言しました。

バガヴァーン・ニッテヤーナンダのようなシッダの師が肉体を離れる時、その存在は完全に至高なる意識に融合します。

バーバ・ムクターナンダは、彼のグルについて言っています。「彼はあまねく浸透している。あなたがどこにしようと、彼のことを考える時、彼はあなたの目の前に立っている」²

そしてこれが、長年にわたって、世界中の探究者が、瞑想の中で、夢の中で、自然の中で、彼の画像を見ることを通して、そしていつでも、ただ彼を思い出すことによって、バデ・バーバのダルシャンを持つことができた理由です。

バデ・バーバは、内側へ、自分の最も深い大いなる自己へと向かうことの重要性を力説したグルでした。大抵の場合、彼は沈黙していました。めったに話しませんでした。けれども、彼の一言、ちらりと投げ掛ける視線、あるいは、彼を一目見るだけでも、それは受容力のある探究者のマインドを静め、内側に神の体験を与える力を持っていました。それは今日に至っても事実です。

これから、バガヴァーン・ニッテヤーナンダのダルシャンを持った人、3人の話を聞きます。これらの話は長い年月にわたりますが、それでもなお現代の私たちにバデ・バーバの存在を呼び起こします。

話を聞く前に、姿勢を整える時間を取りましょう。

それぞれの話を聞く時、完全に注意を向けてください。話を聞くことによってバガヴァーン・ニッテヤーナンダのダルシャンに招かれているのだという意識を持ち続けましょう。

これから、最初の話聞きます。イギリス出身の SYDA ファウンデーションのスタッフ、パルナ・デービスが朗読します。

[オーディオプレーヤー]

ガングバーイーの話は、バデ・バーバの存在は探究者の内なる状態を完全に変容させることができることを示しています。バデ・バーバのダルシャンを持つことにより、ガングバーイーは自身の最も深い存在に意識の焦点を当てるよう引き込まれました。ダルシャンの神秘的な力は、彼女の心の動揺を一掃し、生来の静けさと平和の体験へと彼女を導きました。バデ・バーバの沈黙の仲間となって、彼女は自分自身の心の完全さを発見しました。

これから、2 番目の話を聞きます。メキシコのメキシコ市出身の SYDA ファウンデーションのスタッフ、ギリ・バラオーナが朗読します。

[オーディオプレーヤー]

バガヴァーン・ニッテャーナダのような存在の仲間にいることは、私たちの限界ある概念を打ち破り、神の体験、内側の真理の体験へと私たちを導きます。ヴェンカトゥ・ラオの話に美しく描かれているように、グルのダルシャンは私たちの認識をすっかり浄化します。グルの存在に自分自身を開くことは、自分自身の内側に、存在していると想像すらもできなかった甘美さ——自分自身の神聖さの体験——を起こすのです。

これから、3 番目の話を聞きます。インド、プネー出身のシッダ・ヨーガの生徒、ニーレーシュワリー・シャルマが朗読します。

[オーディオプレーヤー]

このシッダ・ヨーギにとって、バデ・バーバのダルシャンは帰郷でした。多くの探究者にとっても同様です。そのような存在の实在に同調することによって、私たちは自分自身の真理、自分自身の神聖な愛、自分自身の豊かさを体験できます。バデ・バーバの遍在する愛を思い出すことで、私たちはいつでもダルシャンを持つことができます。

実に多くの方法でこれを行うことができます。例えば、精神修行を行う時に意識的にバデ・バーバの存在を呼び起こすことによって、バデ・バーバの教えを熟考したり彼の画像を見ることによって、グルマーイの詩、「A Temple Without Form 形のない神殿」に没頭することによって、バーバ・ムクターナンダの本、『Bhagawan Nityananda of Ganeshpuri ガネーシュプリーのバガ

ヴァーン・ニッテャーナンダ』を読むことによって、そして一日中いつでも、ただ時間を取って呼吸し、バデ・バーバを思い出すこともできます。

彼の恩恵と祝福は無限です。彼の愛と保護はいつも私たちのためにそこにあります。私たちがあまねく浸透しているバガヴァーン・ニッテャーナンダの存在に心を開く着実な努力をする時、私たちは自分自身の神聖な愛をより十分に知ることができるようになるのです。

物語 1

バガヴァーン・ニッテャーナンダの物語 パルナ・デービスによる朗読

バデ・バーバが、インド、マハーラーシュトラ州のタンサ川溪谷の深いジャングル地域に初めてやって来たのは 1930 年代でした。今日、その同じ場所に、ガネーシュプリーの村の彼のサマーディ・シュラインがあります。その村は、バデ・バーバの信奉者の数が増えるにつれ広がっていきました。

この場所にバデ・バーバが初めて着いた時、そこは多くの樹木で覆われ、人もまばらにしか住んでいませんでした。しかし、そこにはシヴァの寺院があり、バデ・バーバはそこで瞑想のために座ったものでした。

ガングバーイーという若い女性が、この寺院を掃除し、花やその他の崇拝に必要な物を持って来るセーヴァーをささげていました。

何年も後に非常に年老いてから、ガングバーイーはバデ・バーバが寺院の中にいることが初めは気に障ったと語りました。それはとても小さな寺院で、花を供えるために彼女はこの見知らぬ人をよけて歩かなければなりませんでした。彼がそこにいることがあまり嬉しくなかったのです。

ガングバーイーのマインドに疑問がよぎりました。なぜ彼はこの小さな村にやって来たのだろうか。なぜこの寺院に来なければならなかったのだろうか。

しかし、数日、あるいは数週間が過ぎると、ガングバーイーは自分の心の中で何かが変わりつつあることに気づき始めました。

この見知らぬ人と一言も交わしませんでした。彼が毎日瞑想するのを見て、彼について違う気持ちを持つようになりました。少しずつ、自然に、ガングバーイーは、寺院に入った時に見知らぬ人の存在が彼女をいらつかせることはもうなくなったことに気づきました。代わりに、彼女は心が安らぐのを感じました。彼女の心は軽やかに感じられ、マインドは静かになりました。彼女の日々の瞑想は静けさで満たされました。

ガングバーイーはこの見知らぬ人を神聖な存在だと見始めました。彼女の心が開き、瞑想が深まるにつれ、彼女は彼の偉大さの程度を理解し始めました。

彼女はバガヴァーン・ニッテャーナダに仕え始め、彼の恩恵を迎え入れ、彼女の心、マインド、そして瞑想の変化を認め始めました。

ガングバーイー・ボーピは 90 歳を優に超えるまで生きました。生涯を通じてのバデ・バーバの信奉者として、彼女は彼に仕えるにつれ、彼女のこの神聖な存在への愛は広がり続けることに気づきました。彼女の人生は、バデ・バーバの代表的な教えの表れとなりました。

心はすべての聖地の中心である。そこへ行き、歩き回りなさい。

物語 2

バガヴァーン・ニッテャーナンドの物語

ギリ・バラオーナによる朗読

南インドで育ったヴェンカトゥ・ラオは8歳の時、白い腰巻だけを身に着けた手足の長いつややかな黒い肌の男性の周りに、友だちと群がったものでした。

その黒い肌の男性は、欲しがる手が群がる中に手を伸ばして、チョコレートやたくさんのお菓子を彼らに与えました。何度も。そして何度も。さらに何度も。彼は、かばんを持たず、ポケットはなく、見てそれとわかるお菓子の容器は持っていませんでした。それでもお菓子がなくなる様子は全くなく、彼の両手から途切れることなくあふれ出しました。

「彼は何も身に付けていませんでしたが、手からお菓子を出して私たちに与えたのです」と、ヴェンカトゥは今日言います。「あの時の私はそれを説明できませんでした。私はただチョコレートの味は説明できました。それはとてもおいしかったです」

その黒い肌の男性は、バガヴァーン・ニッテャーナンドでした。1924年のことでした…

やがて、ヴェンカトゥ・ラオは、それらのお菓子の味を忘れていきました。実に、十数年後に思い出した時、彼は日常生活を送る中でその甘い味を全く忘れていました。やがて彼は大学生になり、無神論者になり、そしてインドが独立を果たした時、労働省の事務官になりました。

こうして仕事に就いて、彼は業務で頻繁にムンバイへ行くようになりました。彼はそのことを喜びました。なぜなら、彼の長兄のラジゴーパル・バトゥに会う機会を得たからです。彼は兄を自身の先生、グルとして心から愛し、尊敬していました。

しかし、ラジゴーパルもまた、バガヴァーン・ニッテャーナンダというグルを持っていました。1955年のことでした。

ヴェンカトゥ・ラオは思い出します。「兄に会うためにガネーシュプリーに行かなくてはなりませんでした。なぜなら、兄は毎週末——金曜日、土曜日、日曜日——そこに行っていたからです。そして月曜日に彼はそこから直接仕事に行きました」

ヴェンカトゥ・ラオの兄だけではなく、ヴェンカトゥの妻もまた、バガヴァーン・ニッテャーナンダの信奉者でした。彼は語ります。「休暇の間、子どもたちの学校が休みの時、妻は 10 日から 15 日の間ガネーシュプリーに来て泊り、バデ・バーバといいました。子どもたちは彼とよく遊んだものです。私は、休暇が終わる時になると彼らをムンバイに連れ戻すために迎えに行くのでした」

「私は当時、バガヴァーン・ニッテャーナンダの前で決してお辞儀をしませんでした。そしてまた、彼を尊敬することもなかったのです。なぜなら、マルクス主義の中で言われているように、宗教は人間にとって麻薬のようなものだとは私は感じていたからです。私自身の哲学は、生活より重要なものはない、宗教は役に立たない、何か社会活動をしなさい、ということでした」

「兄はもちろん私と議論しましたが、私は説得されませんでした。たとえ私がブラーミンであり、父から直接指導を受け、教育され、教典の知識を教え込まれていたにもかかわらずです」

すると、ある晩、そのすべてが変わったのです。

1956 年のガネーシュプリーは、ヴェンカトゥ・ラオが最初に彼の兄に会うためにそこに行った
1942 年の頃とほとんど変わっていませんでした。当時は、古いシヴァ・テンプルの前に大きな
湖だけがあり、そのそばに、ビメーシュワル・テンプルや、バガヴァーン自身が建てた泥と編ん
だ木の枝でできた宿舎があり、それらの建物の周りにはほとんど何もありませんでした。

その晩、ヴェンカトゥ・ラオは宿舎で彼の家族と眠りました。少なくとも、家族は眠りました。
しかし、詮索好きな彼は、泥と枝でできた扉の隙間からバデ・バーバを見張るために起きて
いました。バデ・バーバは外のベランダで、ただ行ったり来たりしていました。

ヴェンカトゥ・ラオは、次に何が起こったかについて思い出します。「それは確か朝の2時頃、
私は二つの球状の力強い光がテンプルの向こう側のマンダグーニ山の方からやって来るのを見
ました。私はその二つの力強い光が宿舎へと近づいてくるのを見たのです」

「辺りは暗く、私は目を凝らし、やがて私は何かの動物がやって来るのだと分かりました。それ
はヒョウでした。当時、ガネーシュプリーの周辺にはヒョウがいて、牛を狩りにやって来るのでし
た」

「このヒョウはバデ・バーバの所まで静かに来て、彼の隣に座りました。すると、バデ・バーバが
手を伸ばし、その頭をなで始めました。数分間、ずっとヒョウは座っていました。そしてそれから
帰っていきました」

驚きから気を取り直した後、ヴェンカトゥ・ラオは、これ以上驚くことはもうその夜はないだろうと
思いながら、眠るために気持ちを落ち着かせました。それはとんだ見込み違いでした。3時半
頃、彼は目を覚ましました。

「私は、バデ・バーバが私のすぐ前に立っているのを見ました。彼の姿の隅々まではっきり見え、そして私の目は彼の指に引き寄せられました。それは地面を真っすぐ指していました。私は引っ張り上げられる感じがして起き上がり、彼の目を見詰めました」

「彼の目は赤く輝き、非常に力強く、深紅の光で満たされていました。そして、私が彼の前に立つと、バデ・バーバが、『神はいる』と言うのが聞こえました」

「どんな変容が起こったのか分かりません。私に何が起こったのか分かりません。私はただ前に進み、彼の足に触れました。彼は誰も彼の足に触れるのを許しませんでした。その時私は両足に触れたのです。それは、私のすべての疑問、すべての疑念の終わりでした。そうです、『バガヴァッド・ギーター』の最後の節で、アルジュナはクリシュナ神に言います。『私のすべての疑いは消えました。私はあなたの命令に従います』。私もそうだったのです」

疑いはすべて消え、その日からヴェンカトゥ・ラオの心に神への愛が花開きました。

物語 3

バガヴァーン・ニッテヤーナンダの物語 ニーレーシュワリー・シャルマによる朗読

私を 2010 年にシッダ・ヨーガの道にいざなったのは、バデ・バーバでした。私は物心ついた時から、インドに行ってみたいと思っていました。私はドイツに生まれ育ちましたが、ニューヨーク市で働いていたことがあり、その時、瞑想を実践していた人たちがインドへの旅に私を誘ってくれたのです。それはまさに私がやってみたかった類いの旅でした。インドの文化を学び、そこの人々を知るという機会です。

ですから、この瞑想者たちと一緒にインドへ旅しました。私たちは多くの都市を訪れました。ナーシク、アランディ、プネー、トゥリヤムバケーシュワル。多くの寺院や聖地に行きました。私はインドの神聖な伝統の幾つかを学び始めました。例えば、敬意をもって神に近づき、称賛と尊敬を示すためにプラナムをすることなどです。

帰郷の途に就くまさに最後の日に私たちが訪れた町が、ガネーシュプリーでした。私はこのインドの旅のあらゆる面を楽しんでいましたが、ガネーシュプリーに着いた時、この小さな町には何か特別なものがあると感じました。私は、力強い聖人がかつてそこに住んでいたと教えられました。

私はこの聖人のアーシュラムを訪ねました。そこでは、私はメインホールのすぐ外の囲われた区域へ歩み入り、そして聖人が実際に座っていた長椅子を目にしました。私はこの聖人を敬ってお辞儀をしたいという衝動に駆られました。そしてただお辞儀をするのではなく、長椅子の前にお辞儀をしたいと思いました。そこで私はこの神聖な長椅子の上の麻布に私の頭を付け、すると、私は愛の大海としか言いようがないものを感じたのです。突然、愛が私の内側から外へ、私の周りすべてに流れ出ました。それはまるで、私はもはや肉体ではなく、すべてと一つになったようでした。そしてすべてが、無限で、寛大で、豊かな愛で脈動していました。私は完全な喜びの涙で泣き始めました。

私はこのプラナムから起き上がり、他の人たちとアーシュラムの中を歩き回りましたが、この愛の感覚はガネーシュプリーを離れた後も私と共にありました。

ニューヨークに戻ってから、このインドの聖人の名を知るには長い時間がかかりました。そしてさらに、この聖人——バガヴァーン・ニッテャーナンダー——は、ある系譜の一部であり、この系譜は英知の道であり、この英知は手の届くものであり、そしてこの道の精神修行のための

センターが各地にあると知るにはしばらくかかりました。私はインターネットで、ニューヨーク市のシッダ・ヨーガ瞑想センターについて知りました。私はとても嬉しくなりました。

そして、その冬、29 丁目にあるシッダ・ヨーガ瞑想センターに行きました。そこに着いた時、ドアに表示がありませんでした。私はセンターが存在しないかもしれないと思い、雨の中で泣きながら立っていました。すると、ドアが開いて、中で何かが行われているのが見えました。私は中に入りました。人の流れに続き、靴を階下に置いて、上階の大きな瞑想ホールに行きました。

そのホールに入ることはふるさとに戻ったかのようでした。壁にバガヴァーン・ニッテャーナダの大きな写真があり、私はその写真の近くに座りました。

何回かそのセンターを訪ねた後、私はセーヴァーをささげることができると分かり、そして、私がそれについて話した人はとても親切で歓迎してくれました。私は、この女性ジュディスと 3 年間ブックストアでセーヴァーをささげました。ちょうど3年前には、彼女と私は一緒にインドへ行きました。私は再びガネーシュプリーを訪ね、この時はグルデーヴ・シッダ・ピートゥに滞在し、「心への巡礼リトリート」に参加しました。

今、このすべてを振り返ると、私は神聖な愛の感覚を思い出し、計り知れない感謝も感じます。それは、ひとたびそれを見つけたら私の人生を変容するであろうこの道を知るための準備を私にさせた、バデ・バーバの恩恵、グルの恩恵だったのです。



© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。

1 Swami Muktananda, *Bhagawan Nityananda of Ganeshpuri* (South Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 1996) p. 17.

2 Swami Muktananda, *From the Finite to the Infinite*, (South Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 1994) p. 302.